琉球大学学術リポジトリ

大学生における生きがいと社会経済状況, ソーシャルキャピタルとの関連性について

メタデータ	言語: ja 出版者: 琉球大学教育学部 公開日: 2022-04-06 キーワード (Ja): 生きがい, ソーシャルキャピタル, 社会経済状況 キーワード (En): The Sense of Life Worth-living, Social Capital, Socioeconomic Status 作成者: 宮城, 政也, 神谷, 義人, 島袋, 桂, 田中, まりな メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24564/0002017875

大学生における生きがいと社会経済状況，ソーシャルキャピタルとの関連性について

宮城　政也[*1]，神谷　義人[*2]，島袋　桂[*3]，田中まりな[*4]

Relationship among Social Capital, Socioeconomic Status and The Sense of Life Worth-living in College Students

Masaya MIYAGI[*1]，Yoshito KAMIYA[*2]，
Kei SHIMABUKURO[*3]，Marina TANAKA[*4]

Abstract

The purpose of this study was to examine the relationship between SES (Socioeconomic Status) and SC (Social Capital) and The Sense of Life Worth-living for college students.

The analysis was a binominal logistic regression analysis of 947 college students in Okinawa prefecture.

As a result, the group with high SES had a significantly higher The Sense of Life Worth-living than the group with low SES. Similarly, the group with high SC tended to have a significantly higher The Sense of Life Worth-living than the group with low SC. On the other hand, when verified by the combination of SES and SC, the relationship with The Sense of Life Worth-living is different, and those with low SES and low SC have the lowest The Sense of Life Worth-living. However, the group with low SES but high SC tended to have the second highest The Sense of Life Worth-living (Highest is high SES, high SC group).

Therefore, it was suggested that SC should be increased in order to improve The Sense of Life Worth-living of college students, and it was shown that it may be effective especially for the group with low SES.

Keywords：The Sense of Life Worth-living, Social Capital, Socioeconomic Status
生きがい　ソーシャルキャピタル　社会経済状況

Ⅰ．緒言

近年，公衆衛生の領域では健康格差と健康の社会的決定要因が注目されている．近藤[1)]によると，健康水準はその人の社会経済的特性（社会階層，職業，学歴，所得など/以下SES: Socio-economic Status）および社会的環境によって規定され，結果として健康格差が生じ，かつ，国内外でその格差が拡大しているという懸念があるとしている．先行研究[2)]によれば，寿命の延伸した先進国においてなお，低所得者群は高所得者群よりも寿命が短く，疾病の頻度が高いこと，低所得者は高所得者よりも死亡リスクが２倍近く高いことが報告されている[3)]．このように，健康格差は，社会，経済，政治的要素と深い関係があると言える．

一方で，健康を規定する社会的要因の１つとして，ソーシャルキャピタル（以下SC：Social

[*1] 琉球大学教育学部
[*2] 名桜大学　人間健康科学部
[*3] 沖縄国際大学　産業情報学部
[*4] うるま市学校給食センター

Capital）があげられる．SCとは「社会関係資本」「無形の社会資本」と訳され，Putnum[4]は「社会的な繋がりとそこから生まれる規範・信頼であり，効果的に強調行動へと導く社会組織の特徴」と定義している．SCと健康について調査した先行研究[5]では，SCが豊かな社会では，社会的資源の利用が容易であるために健康に対する規範も強くなり，健康に対する情報が伝わりやすく，心理社会的ストレスも少なくなるために，人々の健康状態も良好になると考えられている．

健康格差とSCについて調査した海外の知見では，SESの低い人は概してSCが乏しいこと，SCが低いことは不健康と関連すること，SCはSESが低いことの健康への悪影響を緩和していたことなどが明らかにされている[6]．また本邦における研究[7]では，高齢者の主観的健康とSC，所得格差との関連について，他人を信頼する人が多い地域に暮らす人ほど，主観的健康感が良い傾向にあるとの報告や，所得格差が大きい地域ほど不健康な人が多く，その関係をSCが媒介していることなども示唆されている[8]．したがってこれらの知見から考えられることは，SESやSCの健康への影響は看過できないものであり，より多くの個人や集団，その他の社会的枠組みでの検証が求められる．しかし，これまでの研究を概観するとそのほとんどは一般成人や高齢者を対象としたものであり，児童，生徒や青少年のSESやSCの測定及び健康への影響に関する研究は限られている[9]．

そこで本研究は若年層へのパイロットスタディーとして，大学生を対象に検討を行う事とした．

これまでの研究の健康評価指標は，各種疾病の罹患リスクや死亡リスクなどが中心であるが，大学生の場合それらのリスクは低いため，本研究では健康評価指標として，ヘルスプロモーションの視点により生きがい感を用いた．

青年期は従来「自分の生きる意味（生きがい感）」について悩み，アイデンティティを確立していく時期と言われている[10]．神谷[11]は，生きがい感を「生きがいを感じている精神状態」とし，佐藤ら[12]は，生きがいを「価値ある目標に向かって努力していく過程で生じる充実感」あるいは「目標を達成した時の満足感，それに伴う生の実感，喜び」としている．さらに，近藤ら[13]は，従来の生きがい感としては捉えられてこなかった享楽的側面についても言及している．以上のように，生きがい感とはさまざまな生活感情によって説明され[14] [15]，ポジティブな生活感情を包括し，人間存在の意味や価値に深く関連する概念であることから，QOLと極めて密接な関係にあると考えられている．WHO[16]では，QOLの定義を「個人が生活する文化や価値観の中で，目標や期待，基準および関心に関わる自分自身の人生の状況についての認識」としており，この定義は，WHOの健康の定義「身体的，精神的，社会的に良好な状態であり，単に疾病または病弱の存在していない状態ということではない」を発展させた概念であると言える．したがって，生きがい感を高めることは人々の健康状態を良好に保つ要因であると同時にヘルスプロモーション活動の推進にとって重要な概念であることは言うまでもない．

これらのことから，SESとSCは，人の心の健康を考えるうえで重要なテーマであり，健康格差を軽減できる可能性をもつとも考えられ，その詳細を検証する意義は大きい．そこで本研究では，大学生を対象に，SES，SCと生きがい感の関連性について検証することを目的とする．

Ⅱ．方法

1）調査対象

沖縄県内の国公立･私立の７大学に在籍する１～４学年の大学生1019名の対象のうち，調査拒否した者７名，分析項目に欠損のある者65名を除いた947名(有効回答率：92.9%)を分析対象とした．

2）調査期間

2018年７月～10月

3）調査方法

沖縄県内の国公立･私立の大学の授業を受け持つ先生に調査の趣旨と方法を説明し，了解を得られた授業において授業の前あるいは後に，教室にて自記式無記名の質問紙調査を実施した．

4）調査内容

①フェイスシート

学年，出身，居住形態，部活サークルへの所属，ひと月の生活費・食費・仕送り・奨学

金利用額・アルバイト時間，一日の睡眠時間・学習時間，育った家庭の経済状況，体調を崩す頻度，大学の成績について．

②SES

SESの測定には，育った家庭の経済状況の主観的評価．

③SC

SCの測定には，芳賀ら（2017）が作成した主観的SC尺度[17]（SUSS-U）を用いた．仲間，クラス，教員に関する主観的SC ３因子によって構成され，学生の主観的SCを測定するための十分な信頼性と妥当性を有した尺度である．本研究ではこれらのうち，仲間，クラスに関する主観的SC各11項目を用い，３段階評価で測定した．

④生きがい感

生きがい感の測定には，近藤ら（1998）が作成した生きがい感スケール[13]を用いた．現状満足感，人生享楽，存在価値，意欲の４因子で構成され，青年期以降の成人一般に適用可能な，高い信頼性と妥当性が得られた生きがい感測定尺度である．全31項目に対して３段階評価で測定した．

⑤精神的健康

精神的健康の測定にはGHQ12を用いた．この尺度は中川と大坊が邦訳した60項目からなるGHQ（General Health Qestionnaire）をさらに短縮し，調査時点から２～３週間前までの精神健康状態を測定する尺度である．新納（2001）などによって，日本での妥当性，信頼性が確認されており，抑うつ・不安と活動障害の２因子,12項目で構成されている．各項目について４件法で回答を求め，得点が高いほど精神的健康に問題があるとされる．

なお，SES，SCについては，度数分布を考慮するとともに，結果の解釈を容易にするために２群に再カテゴリ化した．すなわち，SCは中央値で２分化し，高群と低群に，SESは自身が育った家庭の経済状況を「良い」「まあ良い」と回答したものをSES高群，「普通」「あまり良くない」「良くない」と回答したものをSES低群とした．

5）分析方法

IBM SPSS Statistics21を使用して，χ^2検定，二項ロジスティック回帰分析を行った．まず，基本属性別，成績，GHQ12，SES，SCと生きがい感との関連性を検討するために，χ^2検定を行った．次に，従属変数として生きがい感を，独立変数としてSES，SCを投入したロジステック回帰分析を行った．その際，調整変数（精神的健康，学校種別，成績，SC）を同時投入した．さらに，SESとSCを組み合わせて，「SES・SCともに低群」「SES低群・SC高群」「SES高群・SC低群」「SES・SCともに高群」の４カテゴリの変数を作成し，それと調整変数を同時投入したロジステック回帰分析を行った．

6）倫理的配慮

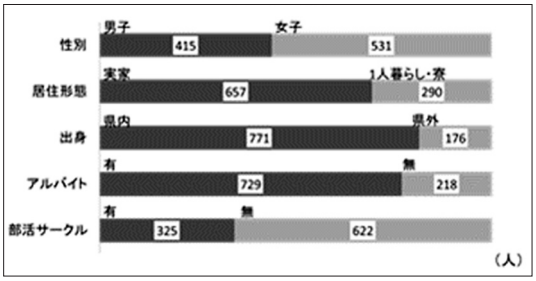
アンケートは全て無記名とし個人が特定されないこと，大学の成績などには一切関係がなく，回答を拒否するために質問紙は白紙で提出しても良いこと，途中で回答を中止しても良いこと，データは研究以外に使用されることはないことを記載し，同意の得られたものに対して実施した．

Ⅲ．結果

1）基本属性

調査対象者の基本属性を表１に示す．調査対象者のほとんどが沖縄県内の出身であったため実家から通う学生の割合が高くなっている．アルバイト従事率は77.0％であり、文部科学省が示した平成28年度の学生生活調査の割合80.2％に近い値であった．部活・サークルへの所属割合は34.3％で、ベネッセが示した55％より低い割合であった．

表１　基本属性



2）SES，SCと生きがい感

調整変数を投入したロジスティック回帰分析により，SES，SCのオッズ比と95％信頼区間を算出したところ，SES高群はSES低群と比べ1.6倍，SC高群はSC低群の3.3倍生きがいを感じやすい傾向にあった（表２，３参照）

表２　SES と生きがい感との関連

		n	生きがい感 OR	(95% CI)
SES	低群	494	1.0	
	高群	453	**1.6**	(1.23-2.20)

OR：精神的健康状態，学校種別，成績，SCを調整したオッズ比
95％CI：95％信頼区間

表３　SC と生きがい感との関連

		n	生きがい感 OR	(95% CI)
SC	低群	457	1.0	
	高群	490	**3.3**	(2.50-4.49)

OR：精神的健康状態，学校種別，成績，SESを調整したオッズ比
95％CI：95％信頼区間

3）SESおよびSCの組み合わせと生きがい感との関係について

表４にSESとSCの組み合わせと生きがい感との関連について示した．調整変数を投入したロジスティック回帰分析により「SES･SCともに低群」と比べて，「SES･SCともに高群」が5.6倍，「SES低群･SC高群」が2.8倍生きがいを感じやすい傾向を示した．「SES高群･SC低群」は生きがい感との間に有意な関連がみられなかった．

表４　SES および SC の組み合わせと生きがい感との関連

	n	生きがい感 OR	(95% CI)
SES, SC ともに低群	256	1.0	
SES高群, SC低群	201	1.4	(0.93-2.16)
SES低群, SC高群	238	**2.8**	(1.86-4.17)
SES, SC ともに高群	252	**5.6**	(3.67-8.58)

OR：精神的健康状態，学校種別，成績，SCを調整したオッズ比
95％CI：95％信頼区間

Ⅳ．考察

本研究では，SESが高い者は低い者に比べて，また，SCが高い者は低い者に比べて，生きがいを感じやすい傾向が見られた．この結果は，先行研究の知見[1]である健康水準は，その人の社会経済的特性および社会的環境によって規定されるとの知見を支持するものであり，さらにソーシャルキャピタルが低いことは不健康と関連する[18]とも一致しており，大学生においてもSESやSCの健康，本研究では生きがいとの関連性が示唆された．

SESと生きがい感については，高齢者の経済状況とQOLの関係を調査した先行研究において，溝田[19]らは経済状況についての主観的評価が低下すれば主観的QOLが低下する可能性があることを指摘している．本研究でも同様の結果がみられたことから，家庭の経済状況は大学生の生きがい感に影響し，QOLの低下に影響する可能性があると考えられる．

SCと生きがい感については，生きがい感とSCという直接的な関係性を調査した研究はなされていないものの，対人関係が安定していると日々の充実感や将来への展望が高まること[20]，主観的SCの豊かな大学にいる学生は大学満足感や人生満足感が高いことが報告されている[21]．したがって，周りの人間との親近感の高さや信頼の強さが，生きがい感を高める可能性を示唆するものであると考える．

次に，SESとSCの組み合わせと生きがい感との関連については，「SES・SCともに低群」と比べて，「SES低群・SC高群」が2.8倍，「SES・SCともに高群」が5.6倍となることが示された．一方で，「SES高群・SC低群」は「SES・SCともに低群」の生きがい感のオッズ比と比較して有意な増加がみられなかった．この結果は，健康格差とSCについて調査した先行研究の結果[6]，「SCは社会的経済的地位が低いことの健康への悪影響を緩和する」と一致しており，SCが高いことは，SESが低い者の生きがい感が低いこととの関連性を相殺効果がある可能性があり，このことは，健康と社会経済格差を考える上で重要な意味を持つと考える．個人では変容が困難なSESに比べて，SCは個人や集団の努力による変容が可能な要因

である．したがって，青年期のQOL向上に向けたヘルスプロモーションにおいて，低いSESという社会経済的不利が持つ負の影響を軽減できる可能性を示す結果が得られた．

現在，大学生のSCを高めることに近い最初の取り組みとしては，入学時ガイダンスを利用し行われている．たとえば，学外宿泊型のガイダンスを行い，学生相互や上級生との親睦を図ったり[22]，教職員との信頼感を深めたりする取り組みがある[23]．また，授業やゼミなどを利用して，新入生のキャンパス生活への適応促進[24]，問題発生の予防や心理的発達の促進を目指した試みが行われている[25]．ほかにも，学生が問題を相談できるようにするため，大学生の学生相談機関を拡充したり，学生の進路決定や就職活動に関する悩みを相談できるようキャリアカウンセリングや就職指導に関する専門部署を設置したり，学生の生活上・修業上の悩みに学生目線から応えるため，指導を受けた上級生が相談にあたるピアサポーターや学習サポーターの制度を設けたりしている[26]．坂本らのレビュー[27]で指摘されているように，地域住民にとって居住地域が重要な空間であるように，学生にとってはキャンパスが重要な生活空間であり，本調査結果は，今後さらに大学側の学生支援の中に「人とのつながりの重要性を含めた健康教育的視点」でSCを高めることを意図した取り組みも重要な観点となるだろう．

Ⅴ．まとめ

本研究の目的は，大学生を対象に，SES，SCと生きがい感の関連性について検証することにあった．本研究では，大学生947名のデータを集計し，SES，SC，生きがい感，精神的健康状態，成績について二項ロジスティック回帰分析を行った．結果として，高SES者は低SES者に比べて生きがい感が高く，同様に，SCが高い者は低い者に比べて生きがい感が高い傾向にあった．また，SESとSCの組み合わせにより，生きがい感との関連の強さは異なっており，SESが低くSCも低い者は最も生きがい感が低いが，SESが低くてもSCが高い者は生きがい感が有意に高い傾向が見られた．以上のことから，SCを高めることは，大学生の生きがい（QOL）を高めるために，特に低SES者に有効である可能性が示唆された．

Ⅵ．本研究の課題と展望

研究の限界として，本研究で用いた，SES指標があげられる．その指標として一般的には親の年収，職業，学歴などが用いられているが、本研究では主観的経済状況を指標とし，単一項目のみで測定した．主観的な質問項目では個人差が生じること，家庭の経済状況が必ずしも大学生の経済状況を反映していない可能性を踏まえると，今回の主観的経済状況は大学生の経済状況を把握するうえで，最適な質問項目であるかどうかについては不明である．

第二に，本研究は，沖縄県の大学に通う学生のみを対象としていることから，本知見を日本全国の大学生について一般化するには限界がある．特に沖縄県は特有の社会的文脈「ゆいまーる」が根付いている地域である．「ゆいまーる」とは，もともと人々が相互扶助でおこなう共同作業の作法である「結」が順番に「回る」，いわゆる労力交換を意味する方言で，今では人々のつながりや助け合いを表す言葉として使われており，Putnumが提唱するSCに近い概念と言える[28]．したがって，元来SCの高い地域，集団に特化した結果である可能性も否定できない．今後は沖縄県外と比較・検証する必要性は大きいと思われる．

最後に，本研究は横断的であるため，因果関係については言及できない．今後，縦断的調査による因果関係の解明が期待される．

Ⅶ．謝辞

本研究の調査目的に同意し，快くご協力頂いた大学生の皆様，調査にご協力（ご調整）いただいた各大学の先生方に心より御礼申し上げます．

Ⅷ．参考文献

1）近藤克則,健康の社会的決定要因（1）「健康の社会決定要因」と健康格差をめぐる動向，日本公衆誌，2010；57（4）316-319
2）相田潤，健康較差と社会的決定要因，ヘルスサイエンス・ヘルスケア　Volume 6，No1（2006）
3）近藤克則ら「高齢者における所得・教育年数

別の死亡・要介護認定率とその性差－AGESプロジェクト縦断研究－」『医 療と社会』, 2012, 22 (1)：19-30.
4）ロバート･D･パットナム（柴内康文訳），孤独なボウリング―米国コミュニティの崩壊と再生―東京柏書房，2006.
5）Kawachi, I & Barkman, L.F.(2000). Social cohesion, social capital and and health.In：Barkman, L.F., Kawachi, I .(eds). Social Epidemiology:174-190. Oxford University Press.
6）UphoffEP, PickettKE, CabiesesB *el al*.（2013）“A Systematic Review of the Relationships between Social Capital and Socioeconomic Inequalities in Health : A Contribution to Understanding the Psychosocial Pathway of Health Inequalities, ” International Journal for Equity in Health. 12:54.
7）市田行信，「ソーシャルキャピタル―地域の視点から―」近藤克則編『検証「健康格差社会」―介護予防に向けた社会疫学的大規模調査』医学書院，2007
8）Ichida Y, Kondo K, Hirai H, et al,（2009）“Social Capital, Income Inequality and Self-rated Health in Chita peninsula, Japan : A Multilevel Analysis of Older People in 25 communities, ” Social science & Medicine. 69(4):489-499
9）高倉実, 沖縄における青少年の危険行動とソーシャルキャピタル，ソーシャル･キャピタルと地域の力―沖縄考える健康と長寿―，日本評論社
10）大林由佳ほか，日本心理学会第71回大会誌（2007）
11）神谷美恵子，生きがいについて，みすず書房1990
12）佐藤文子・田中弘子(1971)：「生きがい感」の心理的研究の試みⅠ 日本心理学会第35回大会発表論文集，509-512
13）近藤　勉・鎌田次郎(1998)：大学生の生きがい感とスケール作成　健康心理学研究11（1)，73-82.
14）平田陽子，青年期における「自立」と生きがい感―心理的自立と対人依存欲求の視点から―，kyushu University Psychological Research，2011;11，177-184
15）大石和男ほか，大学生における生きがい感と死生観の関係―PILテストと死生観の関連性―健康心理学研究20 (2) 1-9)
16）田崎美弥子，野地有子，中根允文「WHOのQOL」『診断と治療』，1995，83 (12) 2183-2198
15）Kawachi,I.,＆Kennedy, B.P.(Eds)(2002), The health of nation : Why inequality in harmful to your health. New York : The New Press.(カワチ,I.,＆ケネディ, B.P.(編) 西 信雄・高尾総司・中山健夫(監訳)(2004). 不平等が健康を損なう 日本評論社)
16）Yamaoka,K.(2008).Social capital and health and well-being in East Asia: A population-based study. Social Science & Medicine, 66, 885-899. doi:10.1 1016/j.socscimed.2007.10.024
17）芳賀道匡ほか，大学生活における主観的ソーシャル・キャピタル尺度の開発，教育心理学研究，2017，65，77-90
18）イチロー･カワチ．命の格差は止められるか：ハーバード日本人教授の世界が注目する授業．東京：小学館．2013;13-16，130-146
19）溝田勝彦ほか，高齢者の主観的経済状況感とQOLとの関係―地域在住女性高齢者を対象として―，生活環境支援系理学療法６，2010，01-193
20）大林由佳，横田正夫，青年期における抑うつと生きがい感についての検討，日心第72回大会，2008，415
ワークを利用した心理教育プログラムの開発人間関係学研究，大妻女子大学人間関係学部紀要，2002，3，227-242
21）芳賀道匡ほか，大学生活におけるソーシャル・キャピタルと主観的ウェルビーングの関連，心理学研究，2016;87 (3) 273-283
22）坂田浩之ら，オリエンテーション形態が心理学科オリエンテーションに対する態度に及ぼす影響，大阪樟蔭女子大学人間学研究紀要，

2005, 4, 75-86
23) 辻野順子ら，学外宿泊オリエンテーションの教育効果の検証，関西女子短期大学紀要，2010, 19, 27-38
24) 森田裕司, 岡本貞雄, 新入生対象の講義「キャンパスライフ実践論」の試み―学生生活全体サポート―，大学生相談研究，2006, 26, 185-197
25) 坂本真士，西河正行，大学生における抑うつ気分のコントロールに関する予防的取り組み:グループ
26) 日本学生支援機構，大学における学生相談体制の充実方策について―「総合的な学習支援」と「専門的な学生相談」の「連携・協働」― 日本学生支援機構，2007
27) 坂本真士ら，学生のソーシャル・キャピタルを高めるための取り組み:学生教員への質問紙調査
28) 神谷義人，ゆいまーるを活用した沖縄型ヘルスプロモーション，日本保健医療行動科学会 33, 22, 2018

追記：

本論文は，平成30年度卒業生田中まりなの卒業論文に加筆，修正を加えたものである.